虚像の報復

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の報復

【Nコード】

N8924L

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

憲二とさやかは付き合い出して三ヶ月になるが、まだ恋人と言える間柄ではなく、今夜こそはと憲二が伊香保温泉に誘った。途中、トンネルに入ったが出口が見つからず、車をリターンさせて速度を上げた瞬間、稲妻が走っていつの間にか車はハイウェイに戻っていた。

しかし、今日は7月26日なのに8月2日になっていた。2年前の無人島旅行の時も同じような出来事が起こっていた。

第一章 たいむ隧道

憲二とさやかは、レストランで食事を終え、夜のドライブに出かけた。

石田憲二、二十四歳。小西さやか、十八歳。さやかは高校卒業後、憲二の勤める会社に入社し三ヶ月が経ったところである。毎年、花のOL争奪戦があり、入社二年目の憲二にお鉢が回って来たのが、さやかであった。

しかし、憲二には大学の時知り合った遠藤美喜という彼女が既にいた。飲み会の席で近寄って来たのは美喜の方であった。

「あなたたち、学生さん？」

かなり酔った美喜が、馴れ馴れしく声を掛けてきた。

「ええ」

憲二は何げなく返事をした。

「そう。私たちと合流しない？」

美喜が怪しい目で憲二を見た。

「おーっ、いいね」

一緒にいる野田が嬉しそうに言った。

美喜は自分のテーブルに戻り、みんなを引き連れ、OL四人のグループが憲二たちと合流した。

今日は美喜の失恋同窓会ということで、同期の仲良し三人が美喜を慰めようと企画した飲み会であった。

憲二たちは、学生最後の夏休みをどうするか、仲間六人で飲んでいたところである。

「ほんとぉー」

美喜が嬉しそうに憲二の腕にしがみついた。

「ほんとだよ。学生最後の夏休みなので無人島へ探検に行こうか話してたところなんだ」

「おもしろそあー」

礼子が興味深く言った。

「それでどこへ行くか相談してたんだけど」

前橋が思案顔で言った。

「ふーん。それいつから行くの？」

美喜が、憲二に甘えた顔で聞いた。

「七月の半ば頃に行く予定だけど」

憲二の片腕は、完全に美喜に占領されている。

「何日くらい行くの？」

智代が聞いた。

「当然、八月いっぱいさ」

中尾が大きな声を出した。

「あなたたちだけで行くんでしょ？」

疑いの目で美喜が聞いた。

「もちろん、この六人で行くんだ」

憲二が、肘で美喜の乳房を押しした。反応するかのように美喜も押し付けてきた。

「私も行きたい」

美喜が小さな声で言った。

「ねえ、私たちも行かない？」

美喜がみんなに聞いた。

「ええ、行きたいわ」

みんなの気持も一緒だった。

「ねえ、一緒に行ってもいいでしょ？」

「そりゃ構わないけど。なあみんな」

野田がみんなに言った。

「ああ、いいんじゃない。でも俺たちみたいにそんなに長く休めるの？」

「そんなには休めないけど、取れるだけ取って行くわ」

智代が手帳を出して、

「八月は、八日から休みだからその前に」

と、ぶつぶつ言っている。

「ところで皆さんには、彼氏はいないのですか？」

紺野が遠慮なく聞いてきた。

「いたら、こんなところで飲んでるわけないでしょ」

大柄の信子が言った。

「じゃ、決まりだ。一緒に行こう」

一人でチビチビとやっていた吉川が言った。

「智代、ちよつとカレンダーを見せて」

手帳に付いているカレンダーを、美喜が首を伸ばして覗いた。

「あらゆる休暇を貰っても八月一日からしか無理だわ」

「そうね、連続でそのまま夏休みに入るからね。それでも大変かもね」

「ええ、しかも四人一緒というのは」

「有給を使うんだから構わないわよ」

「そうよ。だれと一緒に休もうと、有給を使うんだから会社に文句は言わせないわ」

「そうだ、その息だ」

女四人が喋っているのを聞いて、紺野が横からちよつかいを出した。

「そつよね」

美喜が紺野の顔を見た。

「悪いことするわけじゃないんだから、堂々と休むわ」

結局のところ、憲二たちが先に行くことになり、八月に入ってから美喜たちと合流することになった。

その日以来、憲二と美喜は何回かデートを重ね、最後の一線を越えてしまった。

「俺たちは七月の二十六日に出発する」

「あら、決まったのね」

憲二が、ベッドの中で煙草をふかしながら美喜に言った。

「二十六日の夜、晴海埠頭から船で大島へ渡る。大島からはヨットを借りてあるんだ」

「すごい」

「そして、ヨットで無人島に渡る。島で準備を整えて、八月一日には大島へ戻って美喜たちを待つから」

「うれしーい」

「美喜たちは七月三十一日の夜、晴海から大島行きの船に乗ればいいから」

「三十一日の夜に大島行きの船に乗ればいいのね」

美喜がホテルの落書帳にメモし、それを破った。

「その日に来ないと俺たちはいないからね」

「分かったわ。みんなに伝えとくわ」

「休暇は取れたんだろ？」

「ええ、大丈夫よ。休暇届を出すのに、一緒ではいかにもと思われそうだから別々に出したの」

「そりゃ、良かった」

みんなも男だけより、女性が加わった方が楽しみである。女性に加われれば単なる探検ではなく、アバンチュールが期待できるのである。憲二は美喜と付き合っているが、他のみんなはだれとも付き合っていない。憲二は、美喜の方から押し切られた格好で付き合い始めたのである。

車はサンシャインの地下駐車場から首都高に入り、東京外環道路から関越高速に入って北上した。いつもは食事の後、首都高で横浜に出て大棧橋や山下公園でデートをしていたのだが、まだ唇を重ねる程度しか許してもらえず、憲二としては今日がチャンスと思い遠出を決めたのだった。

「どこへ行くの？」

いつものコースと違っていたので、さやかは不安になった。

「ああ、明日は休みだし、ちょっと遠出しようと思って」

「どこまで？」

「伊香保の温泉にでも行こうかと」

「温泉？」

車はかなりのスピードで所沢インターを越えて行った。

「そう、たまにはゆっくりと温泉にでも浸かってのんびりしようよ」

「でも」

さやかは、もじもじしている。

「やだ？」

「うん。そんなことはないけど」

「心配しなくてもいいよ。さやかの言う通りにするから」

憲二は、さやかの不安を察知した。

「何もしないって約束すればいいだろ？」

「うん」

さやかが小さく頷いた。彼女は高校時代に彼氏はなく、そのため男性と話す機会も殆どなかった。さやかは憲二と付き合い出して初めて心ときめきを知ったのだが、純真なさやかは憲二に100%付いて行けず、体を捧げるのはまだ先にと思っている。

一方、憲二の方は付き合い出して三ヶ月になるのに、中々許してもらえずイライラしていた。そんな時は借口として、美喜とのデートを楽しんでいた。

「伊香保の夜景は綺麗なんだ」

憲二が言ってもさやかは黙っている。

車は既に花園インターを過ぎて、上里サービスエリアに入った。

「ちょっとトイレに行つて来る。さやかは大丈夫？」

「今はいいわ」

憲二はトイレに行くのではなく、公衆電話に向かった。伊香保のホテルに予約を取るためである。

憲二は予約を取った後、土産物屋を見て可愛い兎のキーホルダー

を買った。

「はい、ジュース」

「ありがとう」

さやかにジュースと兎のキーホルダーを渡した。

「まあ、可愛い」

さやかの顔が一瞬ほころんだ。兎のキーホルダーを手に取り、ぶらぶらさせて喜んでいる。

憲二は車を出した。まだ時間が早いせいか交通量が多い。車の流れに乗ってスピードを上げた。暗闇に点々と人家の明かりが飛んで行く。

「たまには、こういうのもいいだろ？」

「ええ」

さやかはキーホルダーを握ったまま、窓の外を見ていた。

「そろそろ伊香保の明かりが見えると思うよ」

さやかは黙っている。

車はスピードを上げて走っている。やがて、宝石をちりばめたように輝いている山の斜面に、さやかは心を踊らした。

「あれが伊香保の温泉街なのね」

「そうだよ。さやかは初めて？」

「ええ、初めてよ」

今まで沈んでいたさやかの気持は、嘘のように弾んでいた。

車は渋川、伊香保インターを出て、温泉街へと向かって行った。「結構混んでるね」

インターを出て一般道に入ると、渋滞を引き起こしていた。ちようど夜の一番混む時間帯である。憲二は早くホテルに入って、さやかとゆっくりしたいと焦っていた。

「横道入ってみよう」

車は細い横道に入り、住宅街を抜け、温泉街の方角へどんどん走って行った。人家がまばらになり、田畑が広がり目の前には山が迫っていた。

「こつちでいいの？」

さやかが不安になって聞いた。

「ああ、温泉街は山の上にあるんだ。方角は間違いないから大丈夫だよ」

とは言ったものの、憲二も不安だった。だれか人でもいれば聞くのだが、人家もない。道は細くなり、曲がりくねって来た。山と山の間を縫うように走っている。舗装道路なのでまだ助かってはいるが、道は上りになり辺り一面は深い山だけになってしまった。

「変だな、もう見えてもいい頃なのに」

「ほんと？」

さやかは、不安を隠さずにいられなかった。

「こんな山の中にあるの？ タヌキでも出そうだよ」

「ああ、この山じゃいるかも知れないね」

月に照らされ山が怪獣のように見え、車に襲いかかりそうであった。

「なんだか気味が悪いわ」

「大丈夫、もうすぐだから」

憲二も不安になり、早くこの山を抜けなくてはと、気が焦っていた。こんなところで時間を潰すのが勿体ない。こつちの気持も焦る原因になっている。

「あつ、見えたわ」

急にさやかが大声を出した。

「えっ？」

「あれ、あれを見て」

左手遠くの方に、伊香保の宝石をちりばめた明かりが見えた。

「まだあんな遠くか」

憲二が舌打ちした。

「かなり遠そうだよ。この道で行けるのかしら」

道はくねくねと曲がっている。

「大丈夫、行けるとも」

自信はないが、憲二は自信満々で答えた。

「ちよつと飛ばそう」

目的地が見えたので憲二は不安がなくなり、早くホテルに入りたい一心で車を飛ばした。

キキキキー。

猛スピードでくねくね曲がった山道を走って行った。しばらく走ると前方にトンネルが見えた。上向きのライトがトンネルの名前を照らした。

『たいむ隧道』

猛スピードの中、憲二は読み取る余裕はなかった。しかし、さやかは目でしっかりと読んでいた。

(変な名前)

さやかは別に何の気にもとめなかった。

トンネルの中は真つ暗で、真つすくな道が伸びていた。憲二は早く到着したいため、黙ってハンドルを握っていた。上向きに照らされたライトは、遠く真つすぐに伸びている道を照らし続けている。五分、十分過ぎた。丸つきり同じである。そのままの状態での変化もない。

(変だ！)

憲二が心の中で呟いた。

(もしかしたら？ いや、そんなことはない)

心の中で葛藤が始まった。

「真つすくな道ね」

さやかは前方の直線を見て言った。

「このトンネルを出ると温泉街かしら？ 一直線で走ってるんですもの、きつとそうね」

十五分、二十分。ずっと同じである。

憲二の頭の中には、二年前の無人島旅行のことが脳裏によぎっていた。

第二章 黒い霧

その日は好天に恵まれ、大島からヨットで無人島探しに出掛けた。

憲二たち六人は、ある島を目的に行くのではなく、地図に記されていない小さな名もない島を探すのが目的だった。

ヨットは全員素人で、友人から借りる時に少し教わった程度である。あまり詳しい知識はなく、ただがむしゃらに南へ南へと進路をとって行った。

二時間くらい走ったところでリーダー格の野田が、双眼鏡から目を離し海図に指をさしてみんなに言った。

「今このあたりを走っている。ほら左前方にうっすらと島が見えるだろう？ あれがこの島だ」

みんなは左前方に目をやり、その島を確認した。

「あの島を過ぎると今度は右の方に小さな島が見えてくる。その島を過ぎると、この近くでは海図に載ってる島はない。後は突っ走るだけだ」

野田が満足そうに言った。

「よし、もう一踏ん張りしようぜ」

吉川が大声を出した。

「オーツ」

みんなが氣勢を上げた。

穏やかな波の上を、ヨットは滑るように進んでいた。

「憲二」

中尾が呼んだ。

「なんだ」

「彼女たち、大丈夫だろうな？」

「ああ、八月一日に必ず来るって言ってたよ」

「大したもんだよ」

「何が？」

「憲二のもてようさ」

「そんなことはないよ。彼女たちも暇でしょうがないだけだよ」

「そんな感じだったな」

前橋が横から口を出した。

「暇な同士、大いに遊ぼうぜ」

野田が言った。

「そつだ、そつだ！」

吉川が叫んだ。

そうこうしてる間に、右の方に小さな島が見えて来た。

「あの島の後は我々の島だな」

「そつだ、我々の島だ！」

吉川が、大声を島にぶつけた。

その島も過ぎ、南へ南へとヨットは進んだ。

しばらく何の変化もない海を、ヨットはスピードを上げて走った。

「何か見えるぞ！」

野田が双眼鏡を覗きながら言った。

「黒いドームのような物が斜め左に見える」

「島か？」

「だと思っけど、まだ遠くてよく分からない」

「船とは違うか？」

「何とも言えないな。進路を若干左にとろう」

ヨットはその黒いドームに向かって、まっしぐらに走って行った。

「だんだん見えてきた。船ではないな」

「何なんだ？」

「まだ良く分からないけど、真っ黒で丸い形をしている」

「真っ黒で丸い形？ 何だそれ」

「ああ、半分丸く海の上に出てるんだ」

「ちよつと貸してくれ」

吉川が野田の双眼鏡を取り、目に当てた。

「ほんとだ。ドームみたいだな」

「ドーム？」

「そうだ、ドームだよ。真っ黒なドームが漂ってる。UFOかも知れないぞ」

「まさか？」

「俺にも見せるよ」

双眼鏡をたらひ回しにして、みんなで覗いた。それは確かにドームみたいだった。UFOにも見える。UFOが海に不時着して、半円だけ外に出している姿にも見える。

「とにかく近づいてみよう」

ヨットはその黒いドームに、猛スピードで向かって行った。

「おい、何か変だぞ。ドームというよりホールのようにだ」

「どれどれ」

吉川が再び双眼鏡を覗いた。

「ほんとだ」

そして、大声を出した。

「あれは、ブラックホールだ！」

「えーっ！」

みんなびつくりした。

「間違いない、宇宙のブラックホールと同じような形だ」

「ほんとか？」

「何で海の上にあるんだよ？」

「それは分からない」

ヨットが進んで、肉眼でも見えるようになってきた。

「確かに、真っ黒で穴が空いているが」

「きつとそうだよ」

「でも海の上にあるなんて聞いたことがないよ」

「ちよっと様子を見よう」

野田がみんなに言っつて、ヨットの速度を遅くした。

「ゆっくり近づいて見よう。何だか確認してからでも遅くはない」
「そうだな。野田の言う通りだ。錯覚かも知れないし、幻かも知れない。それとも本当にブラックホールかも知れない」

吉川が不安な顔で言った。

ヨットは徐々に近づいて行つた。その影みたいなものは巨大なものだった。海から半円突き出ていて、真ん中に穴が空いていた。まるでそこいらにある洞窟みtainな形だった。

「これは島かも知れないぞ。この穴が入口になっているのかも」
「確かに島のようにも見えるが、全体がふわふわしている感じもある」

「もう少し近づいて見よう」

すぐそばまで来た。島ではない。何だか分からない。ただ煙のようなものが、大きな口を空けて佇んでいるだけだ。しかも、ビールを一つ飲み込むくらいに巨大なものである。

「回って見よう」

野田が指図をした。ヨットはその巨大な固まりを回って見た。半球の固まりは、裏に回ると穴はなく、ただぼやっと佇んでいた。

「これは一体何だ？」

「煙のお化けか？」

「匂いはないな」

「その瓶をかしてくれ」

野田は空のビール瓶をその中へ投げた。瓶は、すっと煙の中に消えた。何の変化もない。

「ただ偶然に気圧の関係か何かで、煙が固まっただけじゃないのかもしれない？」

「そんな感じだな」

憲二は網でその煙をすくってみた。普通の煙と同じように、煙が少し乱れて網の目からこぼれただけだった。

「もう一度前の方に行つて見よう」

ヨットは最初に見た前の方に回つた。同じ煙だが、色がいくら

か薄く入口のようになっていた。

「何か投げる物はないか？」

今度はビール瓶に紐を結んで、その入口に向かって思いっきり投げた。みんなは固唾を飲んで見守っていたが、何の変化も起きない。しかたなしに紐を手繰り寄せた。何の抵抗もなく、単に海に投げ入れたのと何も変わらず、スルスルと手繰り寄せることができた。

「どうする？」

「ああ」

「思い切って入って見ようか？」

「そうだな」

「みんなはどうだ？」

野田がみんなの意見を求めた。

「何だか分からないけど、危険はなさそうだから入って見てもいいんじゃないか？」

「俺もそう思う」

「そうだそうだ。入ってから考えようぜ」

「探検目的で来たわけだから、入らなければ何の意味もない」

みんなの意見は聞くまでもなかった。

「よし、行くぞー」

野田が大声を上げた。

ヨットはボヤボヤツとした薄い煙の中に入って行った。普通の煙とはちよつと違う。煙くないし、匂いもない。

「一体これは何だ？」

「霧みたいだな」

「黒い霧か？」

「ああ、息苦しくないからこれは霧だよ」

ヨットは奥へと進んで行った。外から見た時はそんなに奥行きはなかったはずなのに、中はかなり広い。

「おかしい」

「何が？」

「ヨットはゆっくりだが走ってるんだぞ」

「ああ」

「もう五分も走ってる。そんなに奥が深いわけはない」

「そう言えばそうだな」

「確かにヨットは走ってるよな」

「ああ、確かに走ってる」

「いくらゆっくりでも、もうとっくに外に出ていいわけだよ」

「辺りは何の変化もない。入った時と全く同じである。」

「霧と一緒に走ってるのかも知れない」

「ヨットと一緒にか？」

「同じ早さでか？」

「そうだよ、それしか考えられない。中尾の言う通りかも知れない。それほど大きくないのに、まだ外に出ないのはおかしいよ。一緒に走ってるに違いない」

「進路を変えてみよう」

ヨットは左の方角に曲がった。みんなは固唾を飲んでじっとしていた。徐々に先の方が明るくなって来た。

「出られるぞ」

何の恐怖心もなかったが、わけの分からない中に居るよりは、外に出た方がいいに決まっている。

少しすると、一瞬眩しい光が走った。

そして、一瞬の内に、元の海に出た。

「一体、何だったんだろうか？」

「ただの霧の固まりだったのかも」

みんなはホッとした表情をした。ヨットの後ろの方には、さっきの黒い霧がモヤモヤと佇んでいる。

「何だか分からないけど、それより島を探そう」

「オツケー」

ヨットは風を受けて快調に進んだ。

「変だぞ！」

ラジオを聞いていた紺野が叫んだ。

「どうしたんだ？」

「おかしいことを言ってる」

「何てだ？」

吉川が聞いた。

「シーツ」

紺野が、口に人差し指を立てた。

それを見て、みんなは耳を澄ましてラジオを聞いた。

“関東地方は八月に入って暑さが厳しくなり、今夜も熱帯夜になる
ところが多く、寝苦しくなるでしょう”

「何だと！」

「八月の予報を流してるんじゃないのか？」

「いや、八月に入ってから今夜も言ってたから、そんなことじゃない」

「じゃ、今は八月と言うのか？」

「まさか！」

「そんなことは有り得ないよ、今日は七月二十六日に決まってるよ。」

ほら、俺の時計、日付が出るから間違いないよ、ほら」

と言つて、吉川は腕時計をみんなに見せた。

「そんなことじゃないんだ！」

紺野が叫んだ。

「他の局はどうだ？」

野田が聞いた。

紺野は違う局に周波数を合わせた。

“今日の暑さはすごかったですね。昨日といい今日といい、八月に入つて急に暑くなりましたね”

「やっぱり今は八月だ！」

「ほんとだ！」

「何でだ？」

みんなは騒然となった。

「そつだ、無線があるじゃないか。あれで確かめてみよう」

野田が、無線で近くを航行している船舶を呼んだ。

“はい、こちら〇〇号。どうぞ？”

“こちらはユーカリ号。つかぬことを伺いたいのですが”

“何かあったのですか？”

“ええ、日付が分からなくなりまして……今日は何日ですか？”

“今日ですか？ 八月二日ですが”

“やっぱり”

“どうしましたか？”

“いや、別に。ありがとうございました”

“……了解。気をつけて”

“どうなってるんだよ！”

「今聞いたように今日は八月二日だ。何だか分からないが八月二日なんだ！」

「あの黒い霧のせいじゃないか」

「そつだな。あの中に入って、確か五分か十分くらいの時間だと思つたが、実際は何日も経つてたんだ」

「タイムスリップしたのかも知れない」

「あの黒い霧のせいだ！」

みんな一斉に振り向いて、黒い霧の行方を追つた。でも、そこにはもう、あの黒い霧は見えなかった。

「こんなことが現実にあるなんて」

「黒い霧の中で少しばかり浮遊してただけなのに、外では何日も経つてしまっていたんだ」

「不思議な現象だ」

「ほんとだ」

みんな我に返つて、ふつとため息が出た。

「わあー、大変だ！」

突然、憲二が大声を上げた。

「どうした？」

憲二の声に、みんなびつくりした。

「今日が八月二日なら、彼女たち待ちぼうけさせてしまった」
「ほんとだ」

ヨツトの上は騒然となった。

「悪いことしてしまった。大島ですつと待っていたらどうなるか」
「無線で大島を呼び出せないか？」

吉川が言った。

「どうすんだ？」

「一日くらいならまだ待つてるかも知れない」
「そうか。呼び出してみよう」

野田が無線機をいじくり回し、何とか大島の港と交信ができた。

「こちらユーカリ号、応答願います」

「はい、大島元町港です。聞こえますか？ どうぞ？」

「聞こえます。そちらの待合室に二十二、三歳くらいの女の人が四人居ませんか？」

「ああ、確かに若い女の子が四人居たが、今朝の便で晴海に帰ったよ」

「帰った？」

「昨日来て、だれかを待っていたみたいだったが、諦めたのか今朝帰って行ったけど」

「そうですか、分かりました」

「よろしいですか？」

「はい。あつ、それと今日は何日ですか？」

「えっ？」

「いや、日付を間違いました」

「今日は八月二日です」

「八月二日に間違いないですよ。いや、ありがとございました」
「あーっ」

全員が大きなため息をついた。

第三章 駆け落ち

「さやか、今日は七月二十六日だよね」

憲二は一瞬ギクツとした。あの日も七月二十六日だった。偶然と言えば偶然だった。

「そうよ、七月二十六日よ。どうしたの？」

さやかは憲二の顔を見た。

「大変だ！」

「何が？」

さやかは、何だか分からないのでキョトンとしている。

「俺たち、駆け落ちと間違えられる！」

「えっ？」

「このまま走ってもこのままだよ」

憲二は成り行きが分かっているのに、落ち着きを取り戻した。

「えっ？ 何？ このままって言うのは」

「ああ、このトンネルはこの車と一緒に走ってるのさ」

「トンネルが走る？」

さやかの頭の中は混乱している。

「一体何を言ってるの？」

「ほら、良く見てごらん」

憲二は車の時計を指さした。

「さつきからもう二十分も走ってるけど、丸つきり一緒だろ」

さやかは時計を見ている。

「速度はずーっと八十キロで走ってる。後十分も走れば四十キロのトンネルだぞ」

さやかの顔がこわばってきた。

「しかも直線で、こんなのあるか？」

「で、でも現に走ってるじゃない」

声が震えている。

「まあね。でも違うんだ。さつき言ったように、このトンネルも車

と一緒に走ってるのさ」

「……」

「だから、いくら走ってもこのままなんだ。出口はないのさ」

憲二が落ち着いた声で言った。

さやかは余計に身震いした。

「何でそんなこと言えるのよ！ ねっ、何で？」

「実は昔同じようなことがあったのさ。日付も一緒に七月二十六日」

「それで？」

「それで抜け出そうと、一緒に走ってるわけだから角度を変えてみたんだ」

「……」

「そしたら」

「そしたら？」

さやかが身を乗り出してきた。

「一瞬のうちに外に出た」

「……」

「ところが大変なことになっていた」

「大変なこと？」

「そうなんだ」

「勿体ぶんで早く言っつて」

さやかは苛立っている。

「タイムスリップしてしまっただ」

「えっ！ 時間がずれたの？」

「そう」

憲二があっさりと言った。

「そうって。やだっ！」

さやかは泣き出してしまった。

「おいおい、泣くなよ」

「だって、どっかへ行っちゃうんでしょ？」

「いや、そんなことじゃないんだ。ただ時間が先に行っちゃうんだ」

「時間が？」

「そう、あの時はね。今回も恐らくそうだと思うよ」

「どんな風に？ どれくらい先になるの？」

「八月二日にさ」

「八月二日にタイムスリップするわけね」

「さやかは泣くのをやめて、事の成り行きを考えた。」

「ということは、このトンネルを出ると八月二日になってるわけね」

「その通り」

「じゃ、このトンネルはタイムトンネルね。そう言えば、このトンネルの入口に、たいむ隧道と書いてあったわ。あれはゆっくり走らんじゃなくて、タイムトンネルの意味だったのね」

「さやかは変に納得をしている。」

「たいむ隧道？ 入口にそう書いてあったの？」

「ええ」

「なぜ早く教えてくれないんだよ」

「まさか、タイムトンネルとはだれだって思わないでしょ？」

「さやかが口を尖がらせた。」

「それもそうだな」

「憲二はもつともだと思った。」

車は時速八十キロのまま走っている。上向きのライトが遠くの方まで照らしている。霧の中と違ってどこまでも見渡すことができる。

「前と一緒にかな？」

「何が？」

「ここでブレーキを踏んで止まったり、Uターンすれば外に出られるのかなと思って」

「前は、角度を変えたら出られたのでしょ？」

「そうだけど。ここじゃ角度を変えれば壁にぶつかっちゃっし」

「前は何だったの？」

「ヨットなんだ」

「ヨット？」

さやかが素っ頓狂な声を出した。

憲二はその時の様子を説明した。

「要するにくつついて来てるんだから止まるか、Uターンすれば出られるんじゃないの？」

「ああ、そうだと思うけど」

「何よ、気乗りのない返事ね」

「そんなことはないけど、いきなり八月二日では。このままなら七月二十六日なんだ、いつまでも。さやかと一緒にずーっとそのままなんだ。いつも時間が止まってくれないかなと、一緒に居る時は思ってるんだけど。今日は願ってもないチャンスなんだ」

「何をゴチャゴチャ言ってるのよ。そんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

「そうだけど」

「何でもいいから止めてよ」

憲二は、しかたなしにスピードを落とした。七十キロ、六十キロ、五十キロ。

「八月二日だよ」

「いいわよ。何日でもいいわ」

さやかは、そんなことより早く外に出たかった。

キーッ。車が停まった。

さやかは窓を開けてみた。

「普通のトンネルね」

「そうだね」

憲二は車から降りて、今来たトンネルを振り返って見た。

そろそろ明るくなるはずなのに、どうしたんだらう？ 憲二は不安になった。

「憲二さん、どうしたの？」

さやかも車から降りてきた。

「中々明るくならないんだ」

「前の時はどうだったの？」

「すつと抜けた感じがした」

「空気は？ 動いていたの？」

「いや、黒い霧の中だったので良く分らないんだ」

「そう」

さやかは自分の指に唾を付け、手を上げた。

「この空気、全然動いてないみたいよ」

「そんな感じだね。じゃ、Uターンしてみようか」

「そうね」

憲二は車をUターンさせ今来た道に戻った。そして、スピードを上げた。五十キロ、六十キロ、前方が薄明るくなつて来た。憲二はアクセルを強く踏んだ。その途端、一瞬稲妻が走り、目の前が真っ白になったと思つたら夜のハイウェイを走っていた。

キキーツ。憲二は車を停めた。

空には沢山の星が輝き、遠く山の斜面に伊香保の温泉街がキラキラと輝いていた。

「わぁー、綺麗。戻ったのね」

「ああ、戻ったんだ。……電話を探そう」

道路は普通の道で、車の往来が激しかった。普段見慣れている車の数が、無性に懐かしく思えて来る。何台か並んだジュースの自動販売機の隣に、公衆電話があった。

憲二は家に電話を入れてみた。

「はい、石田です」

母親が出た。

「あつ、おつ、俺だけど」

「けんじつ、憲二なのね。今どこにいるの？」

「いや、べ、別に。何かあった？」

憲二はとぼけた。

「何言ってるの！ 小西さんも一緒でしょ？」

「ああ」

「おい、どこにいるんだ」

いきなり父親に替わった。

「伊香保だけど」

「伊香保？ 伊香保のホテルから連絡があったけど、どうなってるんだ？」

「いや、温泉に行こうと思って・・・」

「何呑気なこと言ってるんだ。みんな心配してるのに、とにかく無事なんだな」

「ええ、何とか・・・」

憲二は言いようがなかった。本当のことを言っても信じてくれるわけがない。

「ところで今日は何日？」

日付が大事だった。

「八月二日に決まってるだろ！ 何でもいいからすぐに帰って来い。分かったな」

「ああ、分かったよ」

「小西さんの家にも連絡しとくから、真っすぐ家に帰って来るんだ。早くな！」

「ああ、分かった」

えらいことになってしまった。さやかの家にまで迷惑を掛けてしまった。誤解を解かなくては。

憲二は野田に電話した。野田も、憲二が駆け落ちしたのかと思っていた。

「そんなんじゃないよ。例のタイムスリップだよ」

「何っ！ 又出たのか？」

「そうなんだよ。今度はトンネルで出た」

「そうか、それは大変だったな」

「そこで誤解を解きたいんだ。頼むから俺ん家に来てくれないか？」

「構わないけど、信用するかな？」

「ありのままを言えばいいんだよ。信用するもしないも勝手さ。な、

頼むよ。今、伊香保にいるんだけど、これから家に帰るから」

「分かった」

憲二は、みんなが誤解していることをさやかに話し、自分もこれから家に戻りすべて話すことを伝えた。

「ええ、分かったわ。信じようと信じまいといいわ。本当のことなんだから」

さやかは開き直っている。

第四章 七月二十六日

信用したのかしないのか、みんなの反応は曖昧だった。憲二とさやかの演技にもとれたし、野田の経験を交えて本当ともとれた。そんな複雑な気持のまままで話し合いは終わった。

「しかし、二度も遭遇するなんて、お前はついてるのかついてないのか」

一段落して、憲二の部屋で野田が冗談まじりに言った。

「ああ、おかしな話だ」

憲二はホツとした。さやかの親からの執拗なる攻撃。警察にも搜索願を出して大騒ぎをしていたなんて、憲二もさやかも知る由もなかった。

「ところで、さっきの彼女とはできてるんだろ？」

野田がニヤニヤして聞いてきた。

「そんな仲じゃないんだ」

憲二は言葉を濁した。

「伊香保のホテルに予約していたんだから、ごまかしても無駄だぞ」「いや、ほんとにそこまで行ってないんだ」

憲二は否定した。実際、そのような思惑があったのだが、あの変なトンネルに入ってしまったために、後悔はしていた。

「まあ、いいか」

野田は、ようやくその件について解放した。

「ところで、前の時と今度では何か変わったことは？」

「大体同じだな」

「トンネルと言ったが、霧はなかったわけだろ？」

「ああ」

「普通のトンネルだった？」

「俺にはそう見えたが。変なトンネルだったら入らないよ」

「そうだよ。入らなければいいんだよ」

野田が自信ありげに言った。

「あの黒い霧の時も、入らなければ良かったんだよ。敢えて入ったからタイムスリップしてしまった。入らなければ何事も起きない」

「そうか。そうすれば彼女たちと楽しいキャンプができたんだ」

憲二は後悔した。

「渋滞で近道をしようと思って違う道を行ったわけだろ」

「そうだよ」

「じゃ、渋滞してなければどうだった？ そんな山道を走らなくても済んだし、トンネルに遭遇することもないだろう。まして、たいむ隧道なんて聞いたこともない」

「俺は見えないけど」

「普通の道を走ってればホテルに着いて、彼女と楽しい時が過ぎたわけだ」

「そう言うこと。あーあ、ついてない」

憲二は、ごろんとベッドに横になった。

「分かったぞ」

野田が手を叩いた。

「何が？」

「お前のやましい気持を阻止するために、タイムスリップしたんだ」「なぜ？」

「憲二様、私はまだ純真な乙女、あなたに抱かれるわけにはまいりません。どうか神様お願い・・・と」

「さやかか、そうしたと言うのか？」

「いや、お前がそうしたんだよ」

「何で俺が？」

「前の時もそうだよ、きつと。彼女と楽しいことを考えていたから、阻止してやれとタイムスリップしてしまっただよ」

「どうしてだよ？」

憲二がムツとした。

「お前は、七月二十六日と言う日に何かあるんだよ。先祖の人が特別何かした日とか、大事な何か、特別な日じゃないのか？ それでその日は何事も起こらないように、見守っているのかも知れない」「ばかばかしい」

憲二はまともに聞かなかった。

「じゃ何か、俺に何か憑いているってーの？」

「その通り、何か憑いてるんだと思うよ」

「あまりに飛躍してないか？」

「でも、二度遭遇したのは憲二だけだぞ。それに二度とも憲二に女性が関係してるじゃないか。そして、同じ日。これは偶然ではなくて、その日に何かがあるんだよ」

憲二は黙って聞いていた。

「お前の守護霊かも知れないぞ」

「まさか！」

憲二がゾツとした。

「試しに、違う日に同じような行動を取ってみな。おそらく何も起こらないと思うよ」

「そうだな。違う日は、確かに何も起こってないな。今度よく試してみよう」

「それで何もなかったら、来年の七月二十六日に、同じことを大勢の人と一緒にやるんだよ。報道人も呼んで」

「なるほど、それは面白い」

野田の案はなかなかだと、憲二は思った。

「そして、それまでに色々と実験をして、七月二十六日の日を過去

の出来事から調べておくんだ」

「分かった」

これが解明されれば、何か世の中のためになるんじゃないかと、憲二は思った。

第五章 もう一人の体験者

次の日、タイムスリップに遭遇した六人の仲間にはさやかも加わって、居酒屋で集まることになった。

「また起こったんだって？」

吉川が、いきなり憲二に聞いてきた。

「そうなんだよ、びっくりしたよ」

「小西さんもびっくりしたでしょ？」

「ええ。何が何だか分からなかったわ。突然日付が変わるなんて」
「そうでしょう、そうでしょう。我々も何だか分からないまま今日まで来てしまったけど。野田の言ったことが正解だと思う」

野田は憲二に言ったことを、この席でみんなに話した。

「でも、そんなことってあるのかしら？」

「絶対にある。憲二の守護霊は女だ」

中尾が酔った目で憲二を見た。

「そこで、新聞社に勤めている紺野に頼みがあるんだけど。七月二十六日の出来事を、過去何十年か見てほしいんだ。そこで何か引っ掛かったら、コピーして貰いたいんだ」

野田が分担を決めた。

「それは構わないけど、俺一人じゃ時間が掛かるし見落としもある。だれか手伝ってくれ」

「よし、俺が手伝おう」

前橋が言った。

「じゃ、その件は二人に頼んだぞ」

社会人になっても、野田はリーダー格としてみんなも認めてい

た。

「さやかさん」

「はい」

「さやかさんは憲二と一緒に、石田家の系図を調べて貰いたい」

「憲二さんと一緒にですネ？」

「そう。まず身近なものから」

「分かりました」

「それと、憲二」

「うん？」

「毎月二十六日に、さやかさんとデートして貰いたい」

「毎月二十六日？」

憲二が怪訝な顔をした。

「そう。七月だけじゃなく、他の月にも起こるかも知れない。だから二十六日にデートをして貰いたい。そして、あの時と同じように、やらしい心を持って望んで貰いたい」

「やだあ」

さやかか赤くなった。

「中尾は国立図書館へ行って、守護霊とタイムスリップのことを、あらゆる文献から書き写してきてほしい」

「オツケー」

中尾は、手帳にその旨を書いた。

「吉川は俺と一緒に、主だった科学者にタイムトンネルのことを聞きに行く」

野田は、残っているショーチューを一気に飲み干した。

「そこで提案なんだけど、毎月二十六日に憲二たちに実験をしてもらうから、次の日にここで落ち合うってのはどうだろう？」

「いや、だめだ」

憲二が断った。

「万が一、またタイムスリップしてしまったら、二十七日に来れない」

「それもそうだ」

野田は納得した顔をした。

「じゃ、二日だ。二日にしよう」

憲二はニヤツと笑って、

「いいね」

と、言った。

野田の提案した作業は、みんな仕事の合間を縫いながら黙々と進んでいた。特に紺野と前橋の調べる新聞記事には、興味を示すものがあつた。それは八月三日付けの群馬版に小さく載っていた。

『さる七月二十六日午後八時過ぎに、渋川市に住む村田仁さん（五十七歳）が伊香保の温泉街から帰る途中、トンネルを走行していたところ出られなくなり、八月二日の同時刻にようやく外に出られたと警察に届け出があつた。警察としては、二十七日に家族から捜索願が出してあつたが、本人が見つかったのでその件についてはコメントを控えている』

「居た！」

紺野が叫んだ。

「あの日、憲二たち以外にもう一人居た」

「えっ！ トンネルに入った人が？」

前橋がびつくりした。

「どれどれ」

と言つて、紺野の指さしたところを見た。

「ほんとだ。憲二たちと同じだ。七月二十六日に入つて八月二日に
出ている」

「この村田と言う人は、憲二たちとは反対に、温泉街の方から入つ
てる」

「そう、反対から入ってる。そして警察に届け出ている。でも警察
は捜索願の一件落着だけで、その他のことはコメントしてない」

「そうだな」

「これはきつと何かがある。俺は群馬支社に連絡をとつてみる。前

橋はもつと見といてくれないか？」

「オツケー」

紺野は早速、群馬支社に連絡をとって、この記事を書いた者と話をした。

「私は東京本社 of 紺野と言います」

「お疲れさまです。あの記事を書いた山田です。どの様なことを聞きたいのですか？」

「あの村田さんと言う人は、確かに失踪してたのですね？」

「ええ。二十六日に帰って来ないので、奥さんが二十七日の朝に捜索願を出しています」

「そして、八月二日に発見されたわけですね」

「そうです。発見されたと言うのではなく、自分の方から警察へ出向いています。新聞に書いた通り、トンネルから脱出したら八月二日だったと言っています」

「これは大変なことではないですか？」

「ええ、本当ならの話ですが」

「嘘なんですか？」

「いや、分かりません。私は半分信じていますのであの記事を載せたのです。でも後から調べて分かったのですが、あの村田さんと言う方は大変女好きでして、前にも二度ほど女性と失踪したことがありましたので、奥さんとしてはすべて承知の上で捜索願を出したらしいのです」

「前の二度についてもそうだったのですか？」

「そうです。ですから警察としても、村田さんの言う事を鵜呑みにするわけにいかないのです」

「それで警察からのコメントがないのですね」

「そうです」

「山田さんはどうしてこのことを知ったのですか？」

「たまたま、他の事件で警察に居た時、村田さんの件を聞いたので取材をしたのです」

「そうですね。山田さんとしては有り得る話だと思いますか？」
「私としては、有ってもおかしくないと思っています。ただ、体験者がちょっとね」

山田は言葉を濁した。

「分かりました。一度、その村田さんと言う人に会わせて貰えないでしょうか？」

「ええ構いませんが。何かあったのですか？」

「いや、ちょっと興味があつたものですから」

紺野は、慎重に言葉を選んで電話を切った。

資料室に戻り、今の話を前橋にした。

「それは本当の話だと思ふな」

前橋は目を輝かした。

「そうだろ、俺もそう思う。早速明日、休みをとって行って来る」

紺野は躊躇しなかった。

野田と吉川は、分野の違う何人もの科学者と会った。現実になれが存在したならば大変なことだと、一様に同じ答えが返っていた。

中尾は、あらゆる書物から守護霊、及びタイムマシンに関するものを抜粋し、ノートに書き写してきた。

そして、憲二とさやかは、石田家の系図を紐解いてみたが、七月二十六日及び先祖に何か変わった人が居たかどうか調べたが、何も出て来なかった。

第六章 証明

紺野は、群馬支社の山田と一緒に村田さんの家を訪ねた。

家は商売をやっており、伊香保の温泉街に出入りしている花屋であった。

「どういう状態だったか、もう一度説明して下さい」

東京からわざわざ話を聞きたくて来たのだと言ったら、一にも二にも喜んで、どうぞと言ふことになった。村田さんとしても濡れ

衣を晴らすために、何とか色んな人に聞いて貰いたかったところであつた。

「八時少し前に橘屋さんを出て、いつもの道で家に帰る途中、渋滞していたので山道に逸れたのです」

紺野はテープレコーダーを片手に持ち、静かに聞いている。

「五、六分走つたところで、トンネルが見えました。こんな所にトンネルがあるわけないと、目を何回も擦つたのだが紛れもなく目の前にあるのはトンネルでした」

「そこで、変だと思わなかつたのですか？」

紺野が質問した。

「ええ、思いましたよ。目の錯覚じゃないかと。薄気味悪くてウターンしようと思いましたが、少し様子を見ようと止まって見てました」

「トンネルをですな？」

「そうです。ところが何の変哲もないトンネルなんです。その内、自分が道を間違えて他の道に来てしまったかなと思つて、トンネルに入つて行つたのです」

「そしたら？」

「行けども行けどもトンネルなんです。時計を見たら三十分も走つてるんです。まさかそんなと思つた時はゾーツとしましたね」

「三十分も走り続けたのですね」

「ええ、これはキツネに化かされたかなと思ひましたよ」

「キツネにですか？」

「そうですね。前にそんな話を聞いたことがあります。これはきつと、俺が普段悪いことばかりしてるんで凝らしめてやろうと、そう思ひましたね」

「なるほど。そして？」

「そして、両手を合わせて二度と悪いことはしませんからと拝んだのですが、何も変わらなかつたので、ええいつと、ウターンしてみたのです」

「Uターンしたのですね」

憲二と同じだ。

「そして思いつきりふかした。あつという間に六十キロ、七十キロになったと思つたら、ピカツと鋭い稲光が走り、気が付いたら外に出ていたんだ」

「またそんな話をしてる」

いつの間にか、村田さんの奥さんが側に来ていた。

「嘘じゃないんだ。俺が女とどっかへ行ったと思つて、でたらめだと言つんだ」

「当たり前でしょ、だれがそんな話を信じると思つもの」

奥さんは呆れ顔で、お茶を置き部屋から出て行った。

「それで？ どこに出ましたか？」

「それが、渋滞をした時によく走る道に出たんだ」

「よく知っている道ですね？」

「そうそう。ただトンネルは影も形もなかったんだ。前にも後ろにもトンネルはない。これはやっぱりキツネに化かされたのだと思つて、そのまま家に向かった」

「そのまま家に向かった？ 警察が先ではなかったのですか？」

「ええ、その前にラジオを聞いていたところ、八月に入ったら暑いですね、なんて言つてたのでびっくりしましてね。たまに寄るドライブインに入つて新聞を見たのです」

「そこで分かつたわけですね」

「ええ、びっくりしたのなんのつて、八月二日の新聞なんです。歯がガチガチしまして、全身から血の気が引きました。それで急いで警察に飛び込んだのです」

「なるほど。キツネが化かしたのでは変だと思つたわけですね？」

「そうです。キツネが何日も化かしているわけがないですからね。ところが警察では信用して貰えず、たまたまそこに山田さんがおりまして、話を聞きたいと言うので記事になったわけです」

「だれか他に、このことについて聞いて来た人はいましたか？」

「いや、渋川の村田とだけ書いてくれましたので、だれも来ませんでした」

「興味がないのですかね？」

「そうですね」

村田さんは苦笑した。

「ところで、村田さんは花をホテルに届けての帰りに遭遇したわけですね？」

「そうですね。いつもは午前中に届けるのですが、あの日は届けた花が気に入って貰えず、違う花と交換に行った帰りなんです」

「あんな時間にですか？」

「ええ、宴席の花でして。七時までに持って来てほしいと言つので、あの時間になつてしまったのです」

「ということは、交換した花を積んでたわけですね？」

「ええ」

「その花はどうしました？」

「あの花は、確かピンとしてたので床の間に飾ったと思うが」

「えっ！ピンとしてた？」

「ええ。・・・そう言えば変だな？」

村田さんが首を傾げた。

「二十六日の夜に引き取って、八月の二日までピンとしてる花なんてありますか？」

紺野はおかしいと思った。

「確かにおかしい。宴席に飾つてあつた花を引き抜いて紙に包んだままのはずだが」

「紙に包んだまま？」

「ええ」

「水にも浸けずに？」

紺野が矢継ぎ早に質問した。

「そうですね。車の中にバケツを入れておくと、ビチャビチャとこぼれるので置かないことにしてるんです。そんなに長い距離ではない

ので直接陽が当たらないようにしてあるだけなんです」

「普段はどうしてます？ その引き取った花は？」

「普段と言っても、そう度々はないですが、まだ使えますから家に持ち帰り、床の間とか玄関に飾りますけど」

「よつするに、まだ使えるってことですね？」

「ええ」

村田さんは、七月二十六日から二十七、二十八と指を折り、何日か数えた。

「ちよつど一週間だ！」

「一週間の間、その花は紙に包まれ、車の中にあつたわけですね。切り花つてそんなにもつのですか？」

「水に浸けて置けば何とかもつけど、紙に包んで置いてあつただけなので、しっかりした状態で残っているということは考えにくいと思います」

「でもピンとしたので、床の間に飾つたのでしょうか？」

「ええ……。ちよつと待って下さい」

村田さんは部屋を出て行った。

「どう言うことなんですかね？」

山田が聞いてきた。

「つまり、花がピンとしたと言うことは、村田さんと花は一週間も失踪してはいないので」

「えっ！ 一週間も失踪してはいない？」

「そうです。花がいい証明でしょう。村田さんも花も何時間、いや、何十分かの失踪だったに違いはない」

山田は、わけが分からない顔をしている。

「ところが、現実の時間は一週間を経過している。浦島太郎の現代版と考えれば分かるでしょう」

「なるほど。ようやく理解できました。これは大変なことだ！」

山田が納得した顔をした。

そこへ、村田さんが奥さんを連れて来た。

「女房もおかしいって言ってるんです」

「確かにあの花はしつかりとしていて、床の間に飾ったのですが、あの時は特に何も感じませんでした。今考えると変ですよ。一週間も紙に包んでいた切り花が、この暑さの中、今切ったばかりのようにはみずみずしいのですから」

「花は覚えていますか？ 最初持って行った時の花に間違いなかったですか？」

「間違いないですね。あの日の花は、橘屋さんが豪華な宴会をすると言つので特別注文された物だから良く覚えています。確かに同じ花です」

「と、なると」

紺野は素早く頭の中を整理した。

「奥さん」

「はい」

「ご主人は一週間も家を空けてなかったのです」

「何だか分からないけど、そうなのかしら？」

村田さんの奥さんが、不安な顔で紺野を見た。

「そうですね。村田さんは、おそらく何十分か、長くても一時間くらい、四次元の空間に入ってしまったのです。ところが、現実では一週間が経っていた。浦島太郎と一緒にです。それを、その花がはつきりと証明したのです」「なっ、俺の言ってることが正しかっただろ」

村田さんが、奥さんに胸を張った。

「でも、何であんたがこんな目に遭わなければならぬのさ」

「いや、それはたまたまあそこを通りかかったからなのです」

紺野が説明した。

「実は、私の友人も同じ頃、あそこを通りかかり四次元の空間に入ってしまったのです」

「他にも居たのですか」

「ええ。ですから取材に」

「そうだったのですか。単なる興味だけかと思いました」

山田は、わざわざ東京から、取材に来るほどじゃないと思って
いた。

「その方も同じ体験をしたのですね」

「ええ」

紺野は詳しく喋らなかつた。

「ところで村田さん。この件に関しては、まだまだ分からないこと
だらけですので、だれにも喋らないで頂きたいのですが」

「いいですよ、だれも信用しちゃくれないですから」

「私はどうなんですか？ 記者として活字にしたいのですが」

「いや、ちよつと待って下さい。もう少し調査してからにしてくれ
ませんか？ この段階じゃ、まだ憶測ばかりですから」

紺野が、山田にニヤツと笑ってみせた。

「東京に帰って資料をまとめてみます。そして何か分かったら報告
しますから、それまで待つて下さい」

「絶対ですよ。これは大変なスクープになるかも知れない。東京の
方で出し抜きはなしですよ」

山田が念を押してきた。実際、花の事実を訴えれば大変なスク
ープになる。これは記者として、じつとしていられないのである。

ただ、相手が村田さんと言うことで、山田も躊躇せざるを得ないが。
「大丈夫、そんなことはしません。お互い情報交換しましょう。実
は、この件に関して我々仲間の研究班を作っております」

紺野は、大島沖で遭遇した黒い霧の件は言わなかつた。当然、
自分も経験したということとは伏せていた。

「分かりました。私の方も、現場をくまなく調査してみます」

「ありがとう」

紺野は山田に礼を言った。村田夫婦にも礼を言って、群馬を後
にした。

紺野と前橋が調べる新聞記事の調査隊に、全員合流した。

過去三年間のあらゆる記事を見るわけだから、大変な作業である。北海道から沖縄まで全てである。

「証明されたのは分かったが、原因と言うか、出現と言うか、そっちの方はどうなんだ？」

野田が紺野に聞いた。

「そっちの方はまだ全然分らない」

「科学者たちは一様に有り得ないって言ってるんだ」

「だれだっけそう思うのが当然だと思う」

中尾が口を出した。

「あらゆる書物を見たが四次元と言うのは科学者たちの夢物語で、実際には研究をしてないんじゃないかな？」

「そうかな、俺はしてると思うよ。ただ研究しても必ず壁にぶつかって、それ以上先に行けないんだよ」

吉川が科学者から聞いたことを喋った。

「今回の事件は、二つとも未来に行ってる。数十分の間に一週間先に行ったわけだが、これは考えることができると思う」

紺野が自分の意見を言った。

「どうやって？」

「例えばの話だが。一週間の間、昏睡状態にすることのできる何かがあったとする。本人はその間起きている時と同じ状態で、短時間しか経ってないように錯覚させる。そして一週間後、闇から目を覚まし、現実に戻る」

「冷凍人間の話みたいだな」

憲二が何かの本で読んだことを言った。

「それとも、これはどっかの国が極秘で実験してるのかも知れない」

「まさか」

「いや、有り得る」

「そうだな。冷凍人間は冷凍保存して、未来に今の肉体を持って行

くわけだが、今回は時間を短縮させている。一時間がほぼ一週間だ。一日で半年、二日で一年だ」

「すごい！」

「現実にごうなればすごい発明だ。二日間つろちよろしてれば一年後だ。これは色んなことができるぞ」

「確かに無限の可能性がある」

「すごいことだ」

「感心してないで、だれがどうやってやったか探そう」

野田がみんなに言った。

「あつた！」

前橋が叫んだ。

去年の七月二十七日付の新潟版に、小さく載っていた。

『湯沢町で二十六日午後六時頃、山の方の空が急に暗くなり、黒い霧のようなものが発生したが数分で消えてしまった。気象庁の話では、目下調査中で、今の段階では原因は分からないと言う。大地震か何か悪いことの前触れではないかと懸念される』

「これは同じものだと思う」

「確かに日付も一緒だ。七月二十六日に起きている」

「三年連続だ。その前もあるかも知れないぞ、見てみよう」

「俺はちよつと聞いて来る」

紺野が出て行った。

「この記事は関係ないかしら？」

『昨夜七時過ぎ、伊豆大島沖でUFOらしい物体が目撃されたと漁船から連絡があり、海上保安庁のリーダーで追跡し、UFOらしい物体は写ったが、その行方はすぐに分からなくなってしまった』

三年前の七月二十七日付の新聞だった。

「俺たちが出会った場所だ！」

憲二がびつくりした声を出した。

「ほんとだ。これは関連があるぞ」

「UFOの仕業なら納得できる」

「まあな」

「でもほんとかな？」

「UFOか？」

「ああ」

「そうだったら面白いけど」

「俺はUFOを信じるけどな」

中尾が真剣な顔で言った。

「私も信じるわ。おそらく今回の事はUFOの仕業だと思うわ」

さやかも、中尾に同意した。

「居ないと言えば嘘になるかも知れないけど、UFOがそんなことするか？」

吉川が言った。

「何かの実験をしたたのかも知れない。四次元の空間を作るために」

「そうよ。UFO自体、四次元を克服して飛んでるんだわ。だから

四次元の空間を作り出すことなど簡単よ」

「それもそうだな」

吉川が頷いた。

そこに紺野が戻って来て、支社から聞いた話をみんなに言った。湯沢町の黒い霧は、ただ山裾に黒い霧が発生しただけで、人が絡んだことはなにもなく自然現象で片付けられたらしい。

第八章 大宇宙科学研究所

憲二は久しぶりに美喜とデートをした。

「久しぶりね」

「ああ、忙しかったもので」

「いい人でもできたんじゃないの？」

美喜が、かまを掛けてきた。何度も電話が来ていたが、その都度断っていたからである。

「そんなんじゃないんだ」

「じゃ、何なの？」

美喜も被害者の一人だからと思い、憲二はさやかとのかつを省いて黒い霧の件を話した。

「あの時の話ね。まだ追っかけてるの？」

「ああ、どうしても納得がいなくて」

美喜としては迷惑な話だった。せつかくの楽しい旅行が、わけの分からないことでパーになってしまったからだ。

「じゃ、いいこと教えてあげる」

「えっ、何？」

「友達の信子知ってるでしょ？」

「ああ、背の高い子だろ」

「そう。その信子の彼、大宇宙科学研究所って言う所に勤めてるの。それであなたたちの話をその彼にしたらしいの」

「うん、それで？」

「そしたら、それは有り得るって言うのよ。それでびっくりした信子が電話をくれたの」

「ああ、有り得るのさ」

「知ったような顔してるわね」

「色々調べた結果さ。それで？」

「それで、ぜひあなたたちに会いたいって言うので何度も電話してたのよ」

「そうか、ごめん。ところで、その人は科学者なの？」

「だと思っけど」

「そう。いいよ、いつでも構わないよ」

どうせ興味本位で聞きたいのだろうと、やめようかなと思ったが、美喜の手前会ってみることにした。

大宇宙科学研究所は、本郷の東大の隣にあった。小さな二階建の建物で、入口に大宇宙科学研究所東京本部と書いてあった。東京本部というからには他にもあるのだろう。

憲二は美喜と一緒に、信子の案内で研究所の中へ入った。信子は慣れた足取りで二階へ上り、A開発班と書かれたドアを開けた。「さ、どうぞ」

信子の言われるまま、部屋に入った。八帖ほどの部屋に書庫がずらりと並べられており、片隅に小さなソファが置かれていた。

「そこに座って待ってて」

と言つて、信子は部屋を出て行った。

「殺風景な部屋ね」

「そうだね。俺もそう思ったたところなんだ。まるで宇宙研究とは関係ないといった感じだね」

憲二は不安を覚えた。

しばらくしてノックがあり、メガネを掛けたいかにも秀才という感じの人物が、信子と一緒に入って来た。

「わざわざお出でいただいて、ありがとうございます」

と言つて頭を下げ、自己紹介した。名前は寺本健一といい、東大の学士を経て、この研究所で働いているとのことだった。

「へえー、じゃ日本の宇宙科学の中心だ」

憲二はびっくりした。まさかこのような機関だとは、冗談半分でやって来た自分が恥ずかしくなってきた。

「いや、そんなに驚かないで下さい。皆それぞれ専門分野で活躍してるわけですから、石田さんと同じですよ」

謙遜の仕方も上手い。学者肌ではないと憲二は感じた。

「どういったことを研究してるのですか？」

美喜が寺本に聞いた。

「詳しいことは言えないのですが、簡単に説明しますと、宇宙に於ける地球の役割です」

「地球の役割？」

「そうです。我々の地球は太陽系に於ける唯一の生物星です。この環境を他の星に求めるための研究です」

「そんなことができるのですか？」

「そこを研究しているのです」

「そうですね」

よく分らないが、美喜は感心した。

「そろそろ本題に入らせて貰ってよろしいですか？」

寺本が憲二の顔を見た。

「どうぞ」

憲二が頷いた。

「彼女から聞いたのですが、二年前の夏に、大島沖で黒い霧を見た
と聞きましたか？」

「ええ、見ました」

憲二は怪訝な顔をした。寺本は、憲二の顔色を素早く読み取っ
ていた。

「いや、失礼。彼女とは一年くらいの付き合いになりますが、つい
先日、友達の彼が変な体験をしたと聞いたものですから、すぐにお
会いしたくて来ていただいたものなんです」

「そうですね。今頃どうしてかなと思ってたんですが」

憲二の疑問は解けた。

「そして、その中に入ったわけですね」

「ええ、入りました」

「その時、自然に入ったのですか？ それとも自分の意志で入った
のですか？」

「自分の意志で入りました」

「不安はなかったですか？」

「そりゃ少しはありましたが、我々大学の仲間と一緒に探検旅行の
途中でしたから、躊躇なく入りました」

「そして？」

「中に入ったのはいいが、今度はいくら進んでも外に出られなくな
ってしまい、ヨットの角度を変えたのです」

「ほお」

寺本は感心している。

「なぜ角度を変えたのですか？」

「いくら進んでも、この黒い霧から出られないので、きつとヨットと一緒に動いてるんだと思いました」

「ヨットと一緒に？」

「ええ、外から見た時、大して大きくはなかったですから。ヨットで全速で走ればあつという間に通過すると思ったのですが、中々外に出ないのでこれはヨットと同じ速さで走ってるのではないかと思つたのです」

「うむ」

寺本が小さく頷いた。

「それで、角度を急に変えればこの黒い霧はついて来られないと思ひ、向きを変えたところ稲妻が光り、その後外に出ていたのです」
「なるほど、考えましたね」

寺本が腕組みをした。

「そして、タイムスリップしたのですね？」
「ええ、驚きました。自分でも半信半疑でした」
「そうでしょうね」

寺本は眉一つ動かさず、もつともな顔をしている。

「七月の二十六日に遭遇して、八月の二日にタイムスリップしたと聞いてますが？」

「その通りです。八月一日に彼女たちと約束していたのですが、間に合わなくて非常に残念でした」

憲二が美喜の顔を見た。

「そうよ、待ちぼうけしてたんだから」

美喜が憲二の腕をつねった。

「それを証明できる物はないですか？」
「そんな物があればとつくに彼女たちに証明してますよ」
「そうよね」

美喜が呟いた。

「証明できるとしたら仲間から聞くしかないと思う。何人もの人間

が体験したのだから、これが一番の証明だと思います」

「そうですね」

寺本が頷いた。

「こんなことが何か役に立つのですか？」

憲二は何のためか聞いてみた。

「ええ。体験談ですから」

寺本は、言葉を濁した。

第九章 疑惑

八月二十六日。憲二とさやかは湯沢町に向かった。

車中、大宇宙研究所での話をした。もちろん、美喜のことは伏せてである。

「へえー、そんな会社あるの？」

「ああ」

「その人、何を研究してるの？」

「よく分からないんだ。何でも、地球の生物を他の星で生きられるか研究してるみたいだけど、実態はよく分からない」

実際何を研究してるのか憲二には分からなかった。

「変な会社ね。まして東大から行って研究してるなんて。きっとすごいことを研究してるのかわ」

「俺も話してて、そんな気がした」

「でも、なぜ今頃になって二年前の話がその人に分かったの？」

憲二はギクツとした。女の感は鋭いから、憲二は曖昧な返事をした。

「ふーん」

さやかは、それ以上突っ込んで来なかった。

車は湯沢町に入り、黒い霧の発生した方向に道を曲がった。紺野の調べで発生した場所は分かったが、被害が出たことは何もなかったという。

「あの山だわ」

さやかが、目指す山を見つけた。細い道が麓まで通じていた。

二人は麓まで行き車を降りた。

「いい空気ね」

さやかは両手を上げ、深呼吸した。

「ああ、最高だね。空気が旨い」

二人は辺りを歩いてみた。そして黒い霧の現れた、その場所に佇んだ。

「発生するかしら？」

「さあ、どうかな。さつきからさやかと変なことを想像してるんだが」

「やだあ」

さやかは赤い顔をして、山の奥へ走って行った。細い道が奥へ続いていた。憲二もその道をゆっくりと歩いて行った。辺りはシーンと静まりかえっていた。

日曜日ではあるが、ハイカーたちはこんな奥までは来ないので、憲二は一人ぶつぶつ言いながら、さやかの後を追った。

細い道は二つに別れ、左側の道は木が両側からかぶさるように生えており、薄暗い道が遠くまで続いていた。右側の道は木がまばらで、陽がたつぷりと注いでいた。

憲二は、薄暗い方が黒い霧の発生に適するんじゃないかと、左側の道を行った。

「おーい、さやかー」

憲二は大声でさやかを呼んだ。道は右にカーブしており、奥に続いていた。鬱蒼としていた木は、だんだん疎らになり陽がいくらか注いできた。今度は左にカーブしており、曲がってみると鉄条網に囲まれ古ぼけた一軒の家があった。

「こんな所に家が」

憲二は呟いて、鉄条網を潜り敷地に入ってみた。裏庭らしく、前の方へ回ってみた。草が背丈ほどに生い茂っているので、手でか

き分け進んだ。すると、車が四、五台停まれるほどの空地に出た。どうやら玄関横の駐車場のようであった。人の気配は全くないが、憲二はなぜか、そろりそろりと歩いた。

(居たっ)

さやかも同じように、そろりそろりと歩いていた。

「さやか」

憲二が小さな声で言った。

さやかは、不意に後ろから声を掛けられたので、一瞬立ち止まって振り向いた。

「びつくりしたわ、どこに行つてたの？」

「さやかこそどこに行つてたんだよ？」

「ええ、別れ道があつたでしょ、あれを右に行つたの。真つすぐな道で、陽がさんと注いでいたので気持が良くて、どんどん歩いて来ちゃつたの。その内、道がカーブしてて曲がったらこの家にぶつかったの」

「そうか、左の道も右の道もこの家に突き当たるのか」

「あら、そうなの？」

「うん。俺は左の道を真つすぐ来たらこの家の裏にぶつかった」

「私は前よ」

「裏は鉄条網で入れないようにしてある」

「前は、門に頑丈な鍵が掛かっていたわ。その回りは鉄条網で柵がしてあつた」

「さやかも潜つて来たのか？」

「ええ」

さやか舌を出した。

「しかし、こんな山の中で何なんだろう？」

「別荘じゃないの？」

「そう見えるけど」

二人は建物の玄関口へ回った。

「あっ！」

憲二が大きな声を出した。

「どうしたの？」

さやかがびっくりして、憲二の腕にしがみ付いた。

「あれを見てみな」

憲二が、玄関の横にぶら下がっている木の表札に指差した。

「えっ！」

さやかも大きな声を出した。そこには、大宇宙科学研究所と書かれていた。

「一体どう言うことだ？」

「本郷の会社と同じなんて、しかもこんな山の中に」

「黒い霧と、何か関係があるな」

「私もそう思うわ」

憲二は建物の中を覗けないか窓を押してみた。窓には全て格子が付いており、外部の者を阻止していた。

「駄目だ、どこも開かない」

「古そうな家だけど、以外と頑丈にできてるわね」

「何かある。そう言えば・・・あの寺本と言う人は、何か探っているような感じだった。黒い霧の話进行何かの役に立っているのではなくて、どう言う結果が出たのか知りたかつたんじゃないかな」

「その研究所の人？」

「そう。きつとそうだよ。この研究所で黒い霧を作って、何か実験をしてるんだよ」

憲二は写真を何枚か撮った。

「そうじゃないとおかしい。ここで黒い霧が発生して、その場所がこの研究所がある。そして、あの寺本と言う人は黒い霧の正体を知っているように思えたし、何かこの研究所で我々の知らない所でとつもないことを企んでいるのかも知れない」

「怖いわ」

「ああ」

憲二も、不安でいっぱいだった。

第十章 点から線へ

結局、八月二十六日は何も起こらなかった。何も九月二日でもなくてもいいので、翌日全員を招集した。

「実は」

憲二が切り出した。

「昨日、つまり二十六日に黒い霧との遭遇はなかったけど、おおよその見当が付いたので、みんなに知らせようと思って今日集まって貰ったんだけど……」

憲二は昨日見たことと、寺本のことを詳しく話した。

「それは絶対に怪しいな」

野田が言った。

「そう思うだろ。紺野、聞いたことはないか？」

「前にどっかで聞いたことのある名前なんだが、どこで思い出せないんだ」

紺野はしきりに手帳をめくっている。

「ところで小西さんは？」

前橋が憲二に聞いた。

「もう来ると思っただけ」

さやかは、大宇宙科学研究所を調べに行っている。

「その大が付いているけど、公の宇宙科学研究所と何か繋がりがあ
るんじゃないか？」

吉川が質問した。

「そうだよ、その通りだよ。ちょっと社に電話して来る」

紺野が席を立った。

「それで、その山の中にあつた研究所はだれも居なかったんだろ？」

「ああ、昨日は日曜日だったからかも知れない」

憲二は地図を睨んでいた。

「黒い霧の発生した所にその研究所があつた」

野田が地図をかざした。

「湯沢、伊香保、大島沖と三ヶ所に黒い霧が発生したわけだ。そして、湯沢の山中にはその研究所があり……」
「ちよつと待って！」

野田の言葉を遮って、憲二が叫んだ。

「湯沢と伊香保と大島沖。一本の線で結べるぞ！」

みんなが一斉に地図を見た。

「ほんとだ。一本の線で結べる。これは偶然じゃないな」

「いいか、今俺が言おうとしたのは、伊香保にも大島にもこの研究所があるんじゃないかと思ったんだ。憲二の発見で、これは確実にあると思う」

野田が言った。

そこに紺野が戻って来た。

「寺本と言う人物は大変な奴だよ。宇宙研で科学技術の第一人者としてやっていたのだが、ある時、とてつもなく恐ろしい発明をし、物体を四次元の空間へ飛ばしてしまう装置を作ったらいいんだ」
「何だって！」

憲二が大声を上げた。

「そうなんだ。我々が四次元の空間に紛れ込んだのは、寺本の仕業だと思う」

「あの野郎」

憲二は、寺本のすました顔を思い浮かべた。

「それで？」

野田が聞いた。

「それで所長に見つかり、装置を壊された」
「なんで？ 素晴らしい発明じゃないか」

「いや、単なるタイムマシンではなく、物体を消滅させる装置だったんだ。物体を移動させるにはまだ研究課題が残されていて、物体をただ消滅させてしまうだけの装置だった」

「未完成だった？」

「いや、寺本としては完成品だったんだ。自分にとって必要ないものは、人間であろうと何であろうと消滅したかったんだ」

「なるほど、独裁者だな」

「頭に来た寺本は、腹心の部下を何名か連れて研究所を飛び出し、本郷に大宇宙科学研究所を作ったんだ」

「恐ろしい奴だな」

信子に教えなくてはと、憲二は思った。

「三つの黒い霧はまだ実験段階だったのか、完成品なのか分からない」

紺野は記者としての勘で言った。

そこにさやかが入って来た。

「遅くなってごめんなさい」

ハアハア胸で息をしている。

「大変なの！ 黒い霧が発生した所に全部あの研究所があるのよ」「やっぱりな」

みんなもそうではないかと思っていたので、さほど驚かなかつた。

「湯沢、伊香保、大島そして新潟県西山町、この四ヶ所に研究所があるの」

憲二は、地図の西山町に印を付けた。

「完全に一直線だ」

「日本列島を二分している」

「一体何を企んでるんだろう？」

「日本列島を半分に切るのかな？」

「そうかも知れない・・・」

「紺野、これは大スクープになるぞ」

野田が言った。

「かも知れない」

紺野は落ち着いて、何かを考えている。

「その西山町にも黒い霧が発生してるかも知れないな」

「有り得るな」

「もし発生してるとなると、三年前だな」

中尾がボソツと言った。

「そうだよ。今年が伊香保で去年が湯沢、そして我々が遭遇した大島が二年前。これは三年前に間違いないな」

「しかも七月二十六日」

「そうだその通り、三年前の七月二十六日。よし、明日西山町に飛んでみる」

紺野は、張り切っている。

翌日、紺野は西山町に来た。まず支社を訪ね、三年前の新聞を見せて貰った。支社では、東京からわざわざ来た紺野をいぶかしかつた。

「何か、事件でもあったのですか？」

若い社員が聞いて来た。

「いや、UFOの目撃がないかと思ひまして」

紺野は出る前に考えていた言葉を言った。

「UFOですか？ そんな話は聞きませんね」

「そうですか」

物好きだなと言う顔をして、その若い社員は奥に引つ込んだ。

紺野は、必死に三年前の七月二十七日以降の新聞を丹念に読み漁った。

寺本が宇宙研を飛び出したのが四年前。そしてその年、本郷に大宇宙研を作り、翌年この西山町に支部を作った。大島も伊香保も、作ったその年の七月二十六日に黒い霧の実験を行っている。と言う事は、三年前の七月二十六日にこの西山町で黒い霧の実験をしてなければおかしい。

あの物体消滅装置を再び作り、消滅するだけでは飽き足らず、物体の移動を試みて黒い霧のタイムマシンができたのだ。毎年七月二十六日に、研究所のある所で実験を行って来た。そして、今度は四つの研究所から一斉にその装置を動かし、黒い霧を発生、連動させ

る。

(どうなるだろう?)

紺野は考えてみた。

瞬間的に日本列島は半分に千切れる。そこに居た人は何が何だか分からずタイムスリップしてしまう。

(これは大変だ!)

しかし、目的は何だろう? 紺野は焦った。

新聞には、三年前にこの町での黒い霧事件はなく、徒労に終わった。

おそらく、三年前が初めての実験で失敗したのかも知れない。

紺野はそう思いながら西山町の大宇宙科学研究所へ行ってみた。

それは町の中心から車で二十分ほど走った、山中の古ぼけた一軒家だった。家の回りには垣根があり、そこには三段の鉄条網が引いてあった。門は閉ざされており、頑丈な鍵がしてあった。

紺野は門から中の様子を伺った。駐車スペースが三、四台分あり、庭の草木は荒れていた。しばらく人が来てない様子である。

紺野は思い切って門をよじ登り、中に入ってみた。家の窓には雨戸が閉めてあり、人の気配は丸つきりない。古いあばら家だけど、雨戸は真新しく、僅かな隙間もなく頑丈に取り付けられていた。この中にその装置があるに違いないと、紺野は確信した。

三年前はなかったが、二年前、去年、そして今年と毎年七月二十六日に行っているわけだから、必ず来年もやるに違いない。しかも、今度は一斉にだ。そして日本列島は二分される。そのあらゆる物体は、一週間後に移動する。メリットは? 来年の七月二十六日に何があるのだろうか?

紺野は、東京に帰る間中考えていた。

第十一章 本当の狙い

紺野と憲二は宇宙科学研究所に行った。寺本健一について聞き

たいと申し出たが、取り合つて貰えず、仕方なしに紺野は名刺を出した。取材と言うことで通されたが、寺本のことを良く思つてないのでどこまで聞き出せるか自信はなかつた。

痩せた背の高い副所長が応対してくれた。

「寺本君は私の後輩でして、それは頭の切れる人でした」

「なぜ辞めたのですか？ ぶしつけな質問で申し訳ありません」

「いや、構わないです。もう随分経ちますから。当時、寺本君は宇宙空間に於ける物体の移動という研究をしていまして。ある日、その研究に成功したのです」

「ほう」

紺野と憲二は熱心に聞いていた。

「そして、それをみんなの前で実験したのです。しかし、寺本君は一つだけ内緒にしていたことがあつたのです。それは物体の移動ではなく物体の消滅だつたのです。分かりますか？」

「ええ」

二人が頷いた。

「物体を跡形もなく瞬時に消滅させるのです。これは完全犯罪を成立させる道具なのです。このことが所長に分かり、犯罪の手助けとなる装置などもつてのほかと、所長はみんなの前で装置を壊してしまつた」

「その時、寺本さんは？」

「何人かの人に取り押さえられ、何もできず涙を流していました」

「そんなことがあつたのですか。それが四年前ですね？」

「そうです」

「いつ頃ですか？」

「ちよつと待つて下さい」

副所長は一冊のノートを持って来た。

「七月二十六日ですね」

「えっ！」

紺野と憲二は顔を見合わせた。

「七月二十六日に間違いないですね？」

「ええ、ほらこの通り」

副所長はノートに書かれていた退職者のリストを見せてくれた。紺野と憲二は、食い入るようにそのノートを見た。そして、おかしいことに気づいた。寺本の退職した下に、五人の退職者が翌日付で連なっていた。おかしいのはその下である。

一年後の七月二十六日、つまり三年前。それから二年前の七月二十六日、去年の七月二十六日。そして、今年の七月二十六日に蒸発とある。

「これは一体何なんですか？」

「それが分からないのです。警察にも捜索願を出しているのですが、毎年七月二十六日に一人づつ蒸発してるのです」

「寺本さんの仕業じゃないのですか？」

「確かに同じ日付なので警察に捜査して貰ったことがあります。しかし、何の証拠も出ぬまま逆に名誉棄損で訴えられました」

「そんな」

二人は絶句した。

「寺本さんなら、その装置を使って出来るんじゃないですか？」

「ええ。でも警察はそんな装置があるわけないの一点張りです、研究所同士の単なる争い事で片付けられてしまったのです」

「その四人の蒸発者は？ 何か繋がりがあるのですか？」

「ええ。四人共所長の腹心で、装置を壊した人間です」

「それだ。それだけ証拠が揃ってるのに警察はなぜ動かないのだろう？」

「結局、馬鹿げた装置の件で有り得ないと思ってるんです。何か寺本君がしでかせば動くのでしょうか？」

「その空間理論が正しければ、物体を消滅させるだけでなく、物体移動、つまりタイムスリップも有り得ますか？」

「寺本君なら、できるでしょう」

「UFOは？」

「可能です」

「分かりました」

紺野と憲二は、全てを飲み込んだ。

「寺本さんが恨みを持っているのは、その四人だけですね？」

「ええ」

「すると、最後は所長だ！」

「えっ！」

副所長はびっくりした。

「所長は、四人が居なくなつて、ひどく疲れきつてしまいました。常々今度は私だと、おっしゃつてはいますが……」

「大丈夫です。我々が解決します」

紺野と憲二は、今まで起きたことを詳しく話した。それを聞いた副所長は、驚きのあまり声が出なかつた。

翌日、五ヶ所の大宇宙科学研究所に一斉捜索が行われた。

そして、寺本の犯罪は立証され、所長の命だけでなく、日本、いや世界を救うことができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924/>

虚像の報復

2010年10月21日20時57分発行